

自立した都市の原型

1. 首都一極集中

東京の中心部にタワーマンションが政府の補助金を受けながら林立し、そこに向かって放射状の通勤路線が朝夕すし詰めサラリーマンを運ぶ。一方、地方都市は過疎化しつつあり、無住の廃屋が増えている。このような国土の利用や都市計画が果たして健全な人間生活をもたらすものか、という問題意識を最近ますます強くしている¹。

人口が首都圏へ一極集中している状態を、増田寛也氏は次のように書いている。

東京都は現在も人口流入が続く、世界でも珍しい都市です。「総人口のなかで一都市の人口が占める割合」を比較すると、パリ、ロンドンは戦後ずっと5%のまま、ニューヨーク、ローマ、ベルリンは15%のままです。しかし東京圏は、戦後60年間で15%から30%近くに上昇し、今も上昇中です。このような都市は、他にソウルしかありません。人口が一都市に集中することには集積のメリットがありますが、経済上、必須ではありません。東京一極集中の是正こそ、人口問題解決の鍵といえます²。

居住環境として決して適しているとはいえない高密度のスプロールと長距離通勤列車にかわる周辺都市構想として、ロンドン郊外のレッチワースにおける「田園都市：ガーデンシティ」の実践例をすでに紹介した³。同様に、ロバート・オウエンとシャルル・フーリエの実践も簡単に紹介したが、ここではこれらの「空想的社会主義者」の構想をもう少し紹介し、産業革命とともに構想された産業者の共同生活体について、もう一歩深く観察してみたい。

2. オウエンとフーリエの構想

ロバート・オウエンは勤勉な経営者であり稀代のヒューマニストであった。そして、人の道徳的責任は個人責任に帰すべきではなくて、その人のおかれた社会環境による、と熱

¹ 「山際の消えた京都と公共空間を私物化する東京」『筒井新聞』第329号(3)

<http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/329/329-3.pdf>

「人口減少という世論」『筒井新聞』第332号(2) <http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/332/332-2.pdf>

² 増田寛也『『人口急減社会』における効果的な少子化対策』『学士會会報』No.912(2015-Ⅲ)、p.6

³ 「スプロールと田園都市」『筒井新聞』第333号(3)

<http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/333/333-3.pdf>

心に論じている⁴。産業革命の真ただ中で、工場を中心とする理想の共同体（それを「社会主義」といった）を建設・運営した、すぐれた実務家であり、その理念を広めようとした伝道者でもあった。

オウエンがニュー・ラナアックおよびアメリカのニュー・ハーモニーにおいて企画建設した共同体（コミュニティー）は、およそ次のようなものであった⁵。

各共同社会は、事情に応じて、500 人ないし 1000 人から成るのが良いと思われる。大きな正方形もしくは平行四辺形の形が、社会の過程的諸設備を調えるのに最も適当な配置を示しているように思える。すなわち、居住用家屋が正方形の周辺を占め、公共建造物が中心に置かれるのである。（中略）建造物の周囲には、その成員に最良あるいはもっとも健康的な食糧を過剰に供給する十分な量の土地がなければならない。（中略）平行四辺形を取り囲む菜園から近距離のところに、作業場と製造工場、洗濯と乾燥用の家屋、穀物倉庫と貯蔵室が置かれよう。適切に配置された樹木が生み出す美化の助けもあって、この結びつき全体は、ほとんどどの状態にあっても、活力と活気に富む田舎の立派な美しい情景を見せるように作られるであろう。

フーリエが構想した共同体ファランジュも同様に、望ましい人数を 1800～2000 人とし、試験的に開始する最少人数を 600～700 人としている。そして共同化する作業として次の 7 つを列記している⁶。

- 1) 家庭労働
- 2) 農業労働
- 3) 製造業労働
- 4) 商業労働
- 5) 教育労働
- 6) 科学の研究および応用
- 7) 芸術の研究および応用

フーリエの死後、その弟子たちの努力で、アメリカで 30 以上のファランジュの建設が試みられ、フランスでも北フランスのギーズに建設され、創立者の死後は住宅協同組合として存続した⁷。

⁴ オウエン「社会制度論」『世界の名著 オウエン、サン・シモン、フーリエ』中央公論社、1980 年、pp.273-275

⁵ オウエン、前掲書、pp.236-238

⁶ フーリエ「産業的協働社会的新世界」、前掲『世界の名著』pp.447-448

⁷ 前掲書、解説、p.78

3. 共同体の存続

これらの共同体は、初期の指導者たちのカリスマ的影響力が薄れると、何らかの形で変質して、一般社会の原則に近い形に修正されているようである。つまり、ひとつの村相当の規模を持つ共同体を運営するには相当信望の厚いマネジメントが必要である。歴史が下るとともに産業革命が大規模化し、労働者階級が社会の圧倒的多数を占めるようになって、オウエンやフーリエの撒いた種は、マルクス・エンゲルスの社会主義国家構想に結び付いて、20 世紀の地球上に多数の「社会主義共和国」を生んだ。ソ連は「ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国」が正式名称であり、ナチスは「国家社会主義ドイツ労働者党」であり、戦後のイラクとシリアを指導したバース党は「アラブ社会主義バース党」である。規模が大きく官僚制になると、ひとつの村のように直接民主制のような話し合いをきめ細かに行うことができず、秘密警察などによって意見の違う者を暴力的に排除して独裁体制を維持することになる。結果として、ソ連は崩壊し、中国は妥協的な体制変換をし、北朝鮮は世襲制の官僚統制国家を維持しているが、今後はじょじょに中国型に変換していくのではないだろうか。

4. ヨーロッパ都市の伝統

社会体制において独裁的な社会主義が崩壊した後も、ヨーロッパの都市においては住環境を尊重する都市計画上の規制は厳格で、産業の都合による一極集中と無秩序な集積とスプロールを野放しにしている国はない。大都市圏が膨張する時は、製造業を含めた産業を伴った完結型の衛星都市を築いて、完結した生活圏を作り出している。そこには中世以来の都市国家（コミューヌ）の伝統が、オウエンやフーリエの産業革命を背景にした製造業を中核とする共同体を構想させ、その延長で職住一体の現代的田園都市構想を実現させているのであろう。

現在の東京一極集中を促進させている都市計画は、生活環境においても、災害に対する抵抗力においても、きわめてリスクの高い方向に向かっている。その無思想ぶりは、ただ平板な物神的資本主義の要請に従っているだけである。150 年前の明治初期の開発独裁の権威に依りかかる姿勢に先祖返りしているに過ぎない。改めて自立した個人主義を土台にした民主主義社会を築き直して、各個人が尊重される住みよい共同体を作っていく必要がある。

(2018 年 7 月 9 日 哲)